

乳幼児期における子どもの心性と croyance についての一考察

－ピアジェの子ども理解の視点を軸に－

A Study of the Mentality and Croyance of Children in their Infancy

－From Piaget's Viewpoint of Understanding Children－

猪 田 裕 子

要 旨

ピアジェは初期における研究の中で croyance とする言葉をよく用いている。その解釈は様々であるが、同義語として用いる事の出来る conviction ではなく、あえて croyance を用いた彼の真意を考察する。何故なら、幼児教育において子どもの自己中心性を善の視点から理解しようとする時、全てを絶対的に信じ込むと言う子どもの心性の様相は非常に重要な意味を齎すからである。また、これを明確にする事で、幼児教育における遊びの質的深まりの重要性も見えてくると考える。

キーワード：「croyance」「信仰」「信念」「自己中心性」「遊び」

はじめに

児童心理学者であるピアジェ (Piaget, Jean. 1896–1980) は、初期⁽¹⁾における研究、特に子どもの心性に関する研究の中で、croyance とする言葉を頻繁に用いている。しかし、その解釈は様々である。岸田秀や滝沢武久等は『判断と推理の発達心理学』(J. Piaget, *La causalité physique chez l'enfant*, Librairie félix alcan, 1927.) の中で「遊びとは、子どもにおいて錯覚への抵抗と言うより、むしろ、自発的なある種の信念 (croyance) を、必然的な他の種類の信念 (croyance) に対立させる能力と言ったほうが良い」⁽²⁾ と、croyance を「信念」と解釈した。一方、大伴茂は『児童道徳判断の発達』(J. Piaget, *Le jugement moral chez l'enfant*, puf, 1932.) の中で「子どもの信仰 (croyance) は、極めて一般的で且つ自発的である様に見える」⁽³⁾ と、croyance を「信仰」とした。

それぞれの解釈に大意はおおよそ変わる所ではないが、そこに恣意性の程度の違いが存在する。実際、ピアジェ自身の回顧録において、宗教と科学との間で感じた葛藤経験を告白する時に「それでも、常に、信仰 (croyance) を持っていた」⁽⁴⁾ と、信仰としての croyance を用い

ている。加えて「神とは生の躍動の形の下での生命であると言う確信 (certitude) をつかんだ」⁽⁵⁾と、彼の研究の原点とも言える恍惚的な喜びをも告白している。更に、彼は2つの信念 (deux convictions)⁽⁶⁾を深く持ったとも回顧している。それは、立証し得る方法的検証をも持たずに、事実の領域において何かを断定するのは一種の知的不誠実さであると言う信念 (conviction) と、個人や学派の真理及び形而上学的信仰やイデオロギーとは全く無関係に、人々の精神が一致する領域と言うものを、はっきりと分離しなければならないと言う信念 (conviction) である。子どもの心性における彼の研究で croyance を考察する際、この解釈を混同してしまうと、その仔細が曖昧となり普遍的真理を真に理解する事は困難となる。

日本における乳幼児教育の時期とは、まさにピアジェの言う croyance が豊かに育まれる時期であり、そこには、無条件に自分の周りにある全ての世界を信じ込むと言う子どもの心性が存在する。また、それは自発的活動としての遊びを通して育まれていくもの⁽⁷⁾とされている。それ故、子どもの発達において croyance の解釈を考察する事は、今後の乳幼児教育における遊びの意義⁽⁸⁾を明確にしていく事においても意味があると考えられる。

1. 子どもの諸概念の発達と croyance

i) 生命の概念の発達と croyance

子どもとは、独自の世界観を持っており、大人のそれとは全く別のものであるとの見方は周知のことである。子どもの発見者と言われるルソー (J.J.Rousseau, 1712-1778) も、その著書『エミール』⁽⁹⁾において、子ども固有の価値を認めている。ピアジェも「子どもは自然界には自発的運動と“生きている”力 (forces vivantes) とに満ち溢れていると思っている」⁽¹⁰⁾と述べる事で、その世界観の存在に注目した。そこで重要となるのが、子どもの中で発達を追って構築される生命の概念である。子どもにとっての世界、特に自然界とは“生きる”若しくは“生きている”と言う力の宝庫でもある。ここでは、子どもの思考を通し全てのものに生命と意識とが賦与され活動している。しかし、それも生命の概念の発達過程において、様々な定義の変化を見せる様になると彼は言う。

その第1段階に当たるのが6歳から8歳までの年齢である。ちょうど自己中心性⁽¹¹⁾が子どもの内を支配する時期と一致する。初め子どもは全てのものに生命と意識を与える。そこには動くものと言う力の定義が存在するだけである。その後、動くものが自発的であるかそうでないかの定義により、生命賦与の在り方にも変化を及ぼすのであるが、この時期はまだ全てにおいてである。そこには、自己中心性ゆえの croyance が存在する。

ピアジェの収集した6歳頃の子どもの概念とは「山は“登る事”あるいは“さえぎる事”であり、田舎は“旅行する事”、太陽は“私達を暖める事”あるいは“私達に光を与える事”」⁽¹²⁾である。ここでの定義は、全ての事物に其々の役割が与えられ、それを満たす為に力が賦与されている。この様な完全なる決定性の観念は、生命の概念を維持する為のものである。更に、彼は「この

決定的原因の概念は、決定的目的の為に全てのものをつくられた創造者 (fabricateur) を意味する⁽¹³⁾と示唆している。つまり、全てを決定的に見せている基盤には、子どもの自己中心性ゆえのcroyanceがあり、それは「全てのものをつくられた創造者 (fabricateur)」の存在を包含しているのである。

その後、第2段階では自発的な運動であるか否かにより生命の概念は定義づけられ、第3段階で、自発的運動と外部から強いられる運動とに区別されると彼は示している。ここで生命は自発的運動と同一視されるのである。この時期の子どもの年齢は8歳、9歳から11歳、12歳へと続くものであり、日本における小学校教育の年齢に相当する。そして、この自発的運動の最後の段階では、全てが動物と植物とに局限されるのである。この様に生命の概念とは「すべての物は目的に向かって導かれ、この目的は、それを達成する手段として自由活動 (activité libre) を想像すると言う考えから生まれて、生命の概念は、漸次的に、力の概念、あるいは自発的運動の原因であると言う概念に変わって行くのである⁽¹⁴⁾とピアジェは言う。この段階にまで達すると、子どもは主観的視点から脱しようとする。つまり、客観的視点でもって自らを眺めようと試みるのである。所謂、脱中心化⁽¹⁵⁾の過程であると言えるが、これにより、自己中心性ゆえのcroyanceは消滅して行く様に見える。しかし、子どもは「太陽は私達についてくると言う考えを捨てた後も、それは生きているとずっと信じ続ける (continuera à croire) 事によって、太陽は私達の行為や幸福の願望と関連する様に見えるのである⁽¹⁶⁾と彼は言う。乳幼児期の子どもの中に存在するcroyanceは、その後の信仰を育む萌芽であると考えられることは可能ではないか。

ii) 力の概念の発達とcroyance

生命の概念から漸次的に進む所に力の概念があり、その発達の仕方は前者のものと酷似しているとピアジェは言う。つまり、両概念の発達過程における定義の在り方がほぼ同じなのである。

その第1の特徴として、動く事が出来るとの定義である。生命のそれにも極めてよく用いられる所である。その後、第2から第4にかけては能動的運動が定義の中心となる。第5の特徴では、力は抵抗するものや壊れないものが強いと定義される。この時点での子どもは、これら抵抗を受動的なものであるとは決して考えない。それは「まさに能動性 (activité) であり、生命そのものに非常に近いと考える⁽¹⁷⁾とピアジェは言う。ここでの抵抗とは、あるがままの状態を維持する姿を指す。例えば、月や太陽が空中に留まっている姿、ベンチ等が外界からの圧力に抵抗している姿等である。そして、最後の段階である第6の特徴により、力は大きさ及び重さに定義付けられるのである。結局、力の概念とはアニミズム⁽¹⁸⁾の名残であると彼は述べており、それは子ども自身の同意により存在するものであり、自己中心性ゆえのcroyanceなのである。更に、この時期の子どもの世界には、偶然と言うものは全く存在していないと言

う。この「いっさいの偶然が存在しない世界を暗黙のうちに信じる (croyance implicite)」⁽¹⁹⁾ 事により、自身のcroyanceの中核に、その創造者 (fabricateur) の存在を意味付けていると考える。

この様に、生命は力と同一視され、力は生命と同一視される。これらは目的なくしては起こりえず、特に力は運動の義務を負っていないとその存在はない。それ故、ピアジェは「子どもの力動論は汎精神論 (panpsychisme) または物活論 (hylozisme) である」⁽²⁰⁾ と述べているのだ。

また、力の概念における子どもの様相は「自我 (moi) の感情が発達すればするほど、力の概念の外延は減って行く。子どもが最大限の実存論 (réalisme)、すなわち自分の自我に対する無知を示す下位の段階では、子どもの力動論は全面的である」⁽²¹⁾ という。つまり、子どもの概念とは己の内的経験から発しており、その基底は自己中心性にある。また、それら概念は「われわれ現代人の常識となっている力の概念よりも、ギリシャ人達が考えていたそれに近い」⁽²²⁾ とピアジェは言う。生命の概念より漸次的に進んだ所にある力の概念は、自分を外界や他人から区別しようとする自我の芽生えと共に次の概念へと進むのであるが、それまでは未分化ながらも絶対的なものの中に浮動している。そこにはギリシャ的な思想⁽²³⁾ に近いものが存在し、その思想の中心には古来より信仰が存在している。子どもの意識する所ではないにしろ、彼自身もこれに類する存在に重要な意味を置いていると考える。

iii) 自我の発達と croyance

上述で触れた様に、子どもの概念における捉え方は大人のそれとは違い、ギリシャ人のそれに近いと言う。つまり、子どもにとって偶然の世界ではあるが、そこには普遍的なものが存在し、それはやがて個々人の信仰へと続く萌芽としての可能性も秘めている。これは、自分の思考を発見しつつある子どもの姿であり、これにより自我が芽生えるのである。この様に、子どもとは「自分自身の思考の存在を知らなければ知らない程、なおいっそうあらゆる物体に生命 (vie) と意識 (conscience) を賦与するのであり、自分の思考を発見すればするほど、事物に意識がある事を否定する様になる」⁽²⁴⁾ と、彼は検証している。

現在、様々な問題を抱える社会の中で、子どもの心に寄り添う教育の姿が求められている。そして、その基盤としての乳幼児教育の在り方にも深い関心が向けられている。そこでは、自己中心性から脱する事のみ視点に注ぐのではなく、自我の芽生えから、その育み方、子どもの心に宿る croyance 等、細やかな配慮⁽²⁵⁾ が必要とされる。特に、この時期の諸概念は非常にゆっくりと発達するため、自我と外界との境界もはっきりとしておらず、思考と事物との関係も漠然としている。結局、自己中心性から脱する為に重要となる自我とは「意識生活のはじめから与えられるのではなく、子ども時代を通じてゆっくりと構成される」⁽²⁶⁾ ものなのである。それ故、子どもの croyance とは、押付けでも教え込みでもなく、自らの自発性でもって蓄積

された内的経験により、乳幼児期から児童期にかけて、ゆっくりと構成されるものであると言える。

II. 子どもの実在とcroyance

i) 子どもの実在における努力とcroyance

子どもにおける実在性⁽²⁷⁾の根底にはcroyanceが存在する。そこには生命が存在し、それ故、実在は生きているものとされる。この様に子どもの観念とは「まずはじめ、絶対的 (absolu) なものとして実現され、その後、多大の骨折りを経て徐々に関係として理解される」⁽²⁸⁾とピアジェは述べている。つまり、自我の発達により客観的及び相対的視点が子どもの内を支配して行く過程には、多大な骨折りと表現している様に、子どもの惜しまない努力が生じてくる。換言すると、自我の発達とは原始的意識の漸次的分離から生じ、その分離は努力があるからこそ可能となる。そこでは、外界の刺激を内なる世界へと搬入し対立させる事で自我が芽生え、相対的關係を自分のものとする事が出来るようになる。この対立において生じるものが努力なのである。

子どもの内から生じる努力とは、ピアジェによると「主観的 (subjectif) なものとして理解される以前に、絶対的 (absolu) なものとして、世界全体に結びついたものとして感じられるはずである」⁽²⁹⁾と言う。この絶対的な努力とは、子どものcroyanceと共に生まれ、それは自己中心性を脱し諸性質の相対性を徐々に意識して行く過程においても必要不可欠なものである。

また、これらは子どもの内に存在する世界全体に結びついており、世界観を構築する基盤となっている。その存在は、主観的理解より以前の絶対的なものである故、子どもの内に早くから努力とcroyanceとが存在している。これは人間が存在する為に初めから与えられたものとして捉える事が出来よう。

ii) 存在論的観点からの子どものcroyance

子どもの自己中心性には、論理的なものと存在論的⁽³⁰⁾なものがあり、その両者が共に独立と依存の関係を繰り返しつつ発達の過程を助長している。相反するものでありながら、互いに依存し合うと言う関係の中核には子どものcroyanceが存在し、それに伴う努力がある事は前述した通りである。ここでの論理的自己中心性とは、所謂、子どもの知的写実主義⁽³¹⁾の姿である。実際に見たものを自己中心性によって歪めて写実すると言うものである。そこには自らが獲得した内的な手本が存在し、あたかも以前に見たものであるかの様に事実を作り上げて行く。この様子を彼は論理的自己中心性と呼称している。

一方、存在論的自己中心性とは、子どものアニミズム、所謂、汎心性の概念が中心となっている。それ故、ピアジェは「子どもとは自然界には自発的運動と「生きている力」に満ち満ち

ていると思っている」⁽³²⁾とし、「運動は生命 (vie) であり、意思 (volonté) であり、能動性 (activité) であり、自発性 (spontanéité) である」⁽³³⁾と考察している。つまり、子どもは事物に生命を賦与し、自分の願いや思考した事は必ず実在として存在すると言う強いcroyanceに捉われるのである。この強いcroyanceは、存在論的自己中心性の発現から消滅に亘る期間、持続される。その後、その消滅により主観的視点からのcroyanceは姿を隠すが、それは人間が人間として存在する意味を生涯に亘り探求して行く基盤としての信仰へと変遷を経て行くと考ええる。

ここでの信仰とは、一般的な宗教を指すものではない。ピアジェ自身は敬虔なカトリック信者である母親に育てられ、宗教教育も十分に受けている故、信仰とはキリスト教を指すと理解される場合もあるであろう。しかし、存在論的に捉えるならば、それは宗教と言う枠に捉われる事もなく、人間が存在する為に必要なcroyanceを子どもの心性に見出していると考ええる。何故なら、彼の研究論文で使用されるcroyanceには、存在や真実等を信じると言う意味合いが濃く含まれているからである。それ故、脱中心化のみを教育の目標とするのではなく、信仰の萌芽としてのcroyanceを、この時期十分に育まなければならないと考える。

III. 子どもの諸発達と信仰としてのcroyance

i) 子どもの知識の発達と大人のcroyance

子どもの知識の発達には、様々な説が存在する。例えば、19世紀末には生物学的思想のもと、子どもの心的発達は遺伝的に決定されるものとし、人類史の諸段階に照応するものと考えられていた。それ故、スタンリー・ホール (S.G.Hall, 1844-1924)⁽³⁴⁾は、知識に伴う子どもの遊びの進化を、祖先の活動の規則的な反復と解釈した。つまり、大人と子どもとは同一視されていたのである。一方、アイザックス (S.S.F.Isaacs, 1885-1948)⁽³⁵⁾は、子どもの知的発達は経験のみに因ると考えていた。⁽³⁶⁾何故なら、子ども達に自分自身の経験を組織させる目的で、可能な限り多くの材料や器具等を環境として与えた所、自ら興味をひいた全ての種類の操作に夢中になったと言う、能動的学校における成果があったからである。

しかし、ピアジェは一度アイザックスの能動的学校を訪れた際、そこでの教育的実験に対し、いくら恵まれた環境にあっても、子どもの精神構造とはその進化を促すだけのものではなかった事や、子どもの活動に科学的意味を与える為には、保育者達による「子ども同士の協働ばかりではなく、大人の協働をも含む社会的な構造が必要である」⁽³⁷⁾等の考察を行っている。つまり、彼の考えとは、子どもと大人とを同一視する伝統的な教育や、成熟を純粹に遺伝的なものと見るものではなく、また、恵まれた教育環境のみに因るものでもない。そこには、子どもの知識の発達において、進化の働きかける可能性を信じると言う大人の存在がある。それは、子ども自身が能動的に活動する事を通じて自ら知識を構成して行く事への可能性を、信じて待つと言う大人の姿である。

この様に、能動的な教育における意義を明らかにした上で、その活動の姿と発達とを信じて待つと言うピアジェの姿の中に、子どもの諸概念の発達過程にあるcroyanceと同様のものが存在していると言える。そして、それが彼を実証主義に陥らせず⁽³⁸⁾、全てにおいて、その成長や進化を信じるという姿勢に繋がったのではないかと考える。

ii) 子どもの社会的関係とcroyance

大人と子どもとを同一視する伝統的な教育では、教師から子どもに働き掛けると言う行動様式しか存在しない。そこでは、集団と呼ばれる訓練の中で「教師は知的道徳的権威をまとい、彼らはそれに服従するしかない」⁽³⁹⁾のである。この強制的性格は、正常に働いている時には双方共に心地よい関係となり、それは子ども達にも受け入れられるが、一旦その調和が崩れると、強制と圧力、威圧的な教育に成り変わってしまい、そこには子どもを信じる大人の存在を認める事は出来ない。一方、新しい教育の方法と呼ばれている能動的な教育⁽⁴⁰⁾では、子ども同士の社会的関係が保障されており、知的探求や道徳的規律の確立においても、子ども同士で作業し協力する事が自由である。そして、そこには必ず子どもを信じる大人の存在を確認する事が出来る。

ピアジェは、勿論、後者を支持しているが、その基盤には、人は生まれてすぐに社会的関係が成立するとの見解がある。それは、赤ちゃんは生後まもなく他人に微笑みかけたり、接触を求めたりすると言う所以からである。そこには、必ず相手に対する愛情と尊敬、絶対的な信頼とが存在し、その全てをcroyanceが育み、発達と共に相互性へと社会的進化を遂げて行く。また、その為には自ら可逆性⁽⁴¹⁾を育まなければならないが、それは決して強制や圧力、権威的な教育では見出す事は出来ない。全ては、子どもの自発的活動としての遊びを信じる事で、子ども同士の社会的関係と自由とが保障されると述べている。

更に、ピアジェは子どものcroyanceと大人のcroyanceの存在を、人間の道徳性の観点から「服従と言う本質的に他律的道徳は、ありとあらゆる事を歪曲に導く。それは、善の道徳を構成する人格的良心の自律について行く事が出来ないので、義務の道徳は現在社会の基本的諸価値に子どもを準備させる事に失敗する」⁽⁴²⁾と述べ、相互のcroyanceを基盤に、社会的関係において成長する自発的な活動としての遊びの教育的意義を、善の道徳と言う観点から考察した。

iii) 子どもの規律とcroyance

相互のcroyanceを基盤とし、社会的関係において成長して行く自発的活動としての遊びの過程には、様々な規律も存在する。しかし、大人の強制的規律は、それが善きにしろ、悪しきにしろ、乳幼児心理の深い諸傾向にまでひびき、非常に重要な結果を齎す事となる。一方、子ども同士における社会的関係になると、特にそれが集団での遊び等においてであると、自ら規律を課す事が出来るのである。それは、大人が決めた威圧的な禁止命令等ではなく、子ども同

士がお互いに確信を持って重んじる事の出来る規律なのである。例えば、それは友達との秘密の場所で、または子ども同士での特別な連帯感や独自の正義感等の相互扶助に存在するとピアジェは言う。この様な子どもの社会生活を目指すためには「子ども同士の協同を大人に対する尊敬と両立させ、それを高次の協同に変える為に、出来るだけ教師の強制を少なくする事を目指す」⁽⁴³⁾ 事であり、子ども自らが規律を課す事なのである。

ここでの規律とは、子ども自身の生活に基づいた、遊びを基盤とする内的規律によって努力するものである。ピアジェの発達理論に従い深まりを齎す *croyance* を、子どもの社会生活の中で、特に、それを自発的活動としての遊びの中で育むと言う見方である。これを、子どもを捉える新たな視点として、現代乳幼児教育に還元して行く事は可能であろう。

おわりに

乳幼児期における自己中心性の時期とは、全人教育としての視点から、それが如何に発現し、育まれ、消滅して行くのかと言う過程の理解を通して、そこに存在する子どもの心性としての *croyance* を育まなければならない時期である。そして、それは子どもの自発的活動としての遊びを通して行われる。ピアジェも「遊びとは、子どもがまさにそれだけを信じよう (*croire*) とする現実なのである」⁽⁴⁴⁾ と述べている。ここでの子どもの *croyance* とは、目には映らないけれど、その存在や真実を信じると言う意味合いのものである。他にも同義語として *conviction* を用いる事も出来るが、それは眼に見える事実等を確信する場合によく用いられる。彼自身も研究の中で *croyance* と *conviction* を同義語としてではなく、区別し使用している事はこれまでにも述べた通りである。つまり、彼は子どもの心性において、創造者への畏敬の念を依拠とした存在や真実を意とする信仰の意を含め *croyance* を用いたのである。それ故、乳幼児期における自己中心性の発現から消滅に亘る期間、我々大人は自らの *croyance* でもって子どもの *croyance* を大切に育み、それを善として捉える姿勢が求められると言える。その上で、子どもの自発的な活動である遊びが重視され、自然本性としての自己中心性の段階を経て、脱中心化へと向かうのである。

乳幼児教育において遊びの質的深まりを問うならば、子どもの *croyance* と自己中心性の善への視点の理解、併せて、我々大人の *croyance* とが必要不可欠であると言える。

〈註〉

- (1) ピアジェ研究者である波多野完治 (1905-2001) は、ピアジェの研究活動を、前期 (1932年まで)、中期 (1959年まで)、後期 (1960年以降) と分類した。本論では波多野氏の前期と言う区分を初期として表記しているが、それは双方共に同意の事である。また、前期にあたる彼の研究とは、1921年から1925年に亘りルソー研究所附属幼稚園で研究を組織し、子どもの言葉や社会環境におけるデータを収集する事で児童の思考の研究として結果をまとめたものである。それが最初に出版され

た5冊『児童の自己中心性』『判断と推理の発達心理学』『児童の世界観』『子どもの因果関係の認識』『児童道徳判断の発達』である。彼は、認識論に取り組む際の材料程度に考え出版したものであったが、それは世界中に読まれる事となった。

- (2) J.Piaget, *le jugement et le raisonnement chez l'enfant*, Delachaux Niestlé, 1978, p.195. (滝沢武久/岸田秀訳『判断と推理の発達心理学』国土社. 1971年, 265頁.)
- (3) J.Piaget, *La représentation du monde chez l'enfant*, puf, 1947, p.181. (大伴茂訳『児童の世界観』同文書院, 1956年, 370頁.)
- (4) J.Piaget, *Sagesse et illusions de la philosophie*, puf, 1965, p.12. (岸田秀・滝沢武久共訳『哲学の知恵と幻想』みすず書房, 1976年, 11頁.)
- (5) *Ibid.*, p.12. (邦訳, 11頁.)
- (6) *Ibid.*, p.22. (邦訳, 19頁.)
- (7) 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省著『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 2015年, 37-40頁. 本論では乳児及び幼児の教育として子どもの遊びを総合的に捉えているため、幼稚園教育要領及び保育所保育指針等個々からの視点ではなく、あえて幼保連携型認定こども園教育・保育要領を使用した。この総則に記載されている教育及び保育の基本は、人格形成の基礎を培う事としており、環境を通して行う教育及び保育を行うとされている。重視される子どもの姿は、主体性を十分に発揮して展開する生活であり、それは遊びを通して総合的に行われるとされている。これは幼稚園教育要領及び保育所保育指針においても同意の記載がされている。
- (8) 猪田裕子著「幼児教育における遊びの一考察 -ピアジェの子ども理解の視点を軸に-」『芦屋大学論叢』第61号, 2014年, 1-2頁. 遊びはそれを研究の対象とする者によって多様な性格を見せるものである故, その視点を定めなければ, 一つの方向性を見出す為の探究は困難になる。そこで本論では, ピアジェの子ども理解の視点を軸に, 自発的活動としての遊びを教育学的視点から捉えていく事とする。
- (9) ルソー著, 今野一雄訳『エミール』岩波書店, 1998年.
1762年に出されたものであり, 直訳すると『エミールあるいは教育について (Émile ou De l'éducation)』である。その内容は, 主人公エミールの誕生から結婚までの成長を記述した小説体の書であり, 幼児期, 児童期等の現在で言う発達段階ごとに教育を論じ, 子ども期や青年期の独自性, 重要性を初めて指摘したものとして, 教育学的な意義がある。その中で「子どもは小さな大人ではない」と述べる事で, 子どもには子ども独特の世界観があり, 決して大人の縮小版ではないと言及している。
- (10) J .Piaget, *La causalité physique chez l'enfant*, Librairie félix alcan, 1927, pp.127-128. (岸田秀訳『子どもの因果関係の認識』明治図書, 1971年, 135頁.)
- (11) 自己中心性とは, あらゆる事を自分に引き付けて考えてしまうため, 聞き手や他者の立場から物事を見る事ができないと言う事である。また, より高次の認知的な思考を可能にするため脱中心化が

行われる。加えて、道徳形成も脱中心化の過程である。

- (12) *Op.cit.*, J.Piaget, *La représentation du monde chez l'enfant*, p.167. (邦訳, 340頁.)
- (13) *Ibid.*, p.167. (邦訳, 340頁.)
- (14) *Ibid.*, p.174. (邦訳, 360頁.)
- (15) 他の人々の見地から物事を見たり、自分自身の見地を他の人々のそれと協調する事を言う。ひとつの次元だけに注目し、他の共応すべき次元が閉却されている自己中心性から、同時に2つ以上の次元が捉えられ関連づけられると言う事である。
- (16) *Ibid.*, p.211. (邦訳, 430頁.)
- (17) *Op.cit.*, J.Piaget, *La causalité physique chez l'enfant*, p.138. (邦訳, 146頁.)
- (18) 自然界のあらゆる事物は、具体的な形象を持つと同時に、それぞれ固有の靈魂や精霊等の靈的存在を有するとみなし、諸現象はその意思や働きによるものと見なす信仰の事である。
- (19) *Ibid.*, p.132. (邦訳, 139頁.)
- (20) *Ibid.*, pp.131-132. (邦訳, 139頁.)
- (21) *Ibid.*, p.143. (邦訳, 150頁.)
- (22) *Ibid.*, p.133. (邦訳, 140頁.)
- (23) ギリシャ思想では、数と単位により律せられるべきであるのは社会的世界とし、自然はむしろ正確な計算や厳密な論理を適用する事のできない蓋然性の領域を代表するものとしていた。
- (24) *Ibid.*, p.143. (邦訳, 150-151頁.)
- (25) 猪田裕子著「遊びにおける哲学的視点の必要性ーピアジェの子ども理解の視点を軸にー」, 『キリスト教教育論集』第19号, 2011年, 6頁。
ピアジェは「自己中心性と言うものは社会的環境や教育によってどれほどまで減殺されるかと言う事を知るよりも、子どもが彼自身のみによだねられたとき、どれほどにまであられるものなのかを知るほうが重要である」と述べる事で、どのように表れ、どのように生まれ、いかに脱却していくのかと言う一連の過程を総合的に理解する事の重要性を我々に伝えている。
- (26) *Op.cit.*, J.Piaget, *La causalité physique chez l'enfant*, p.144. (邦訳, 151-152頁邦.)
- (27) 実在論の起源は古代ギリシャのプラトンが論じたイデア論にまで遡ることができる。彼は個々の感覚を理性で把握することによってのみ実在するイデアを認識することができる」と論じている。また、その弟子アリストテレスも実在を普遍的な概念として捉えており、感覚によって捉えられる個物を第一実体とし、それが普遍化されたものを第二実体としていた。
- (28) *Ibid.*, p.182. (邦訳, 184頁.)
- (29) *Ibid.*, p.142. (邦訳, 150頁.)
- (30) 自己中心的理論には、論理的発達からの自己中心性と、存在論的発達からの自己中心性がある。つまり、論理の発達を条件づける一般的なその過程と、実在の観念の発達を特徴づける一般的なその過程とがあり、それは非常に酷似していると言う。

- (31) 自己中心的思考の段階にある子どもは、見たもの、見ているものを描こうとする視覚的写実主義者ではなく、知っているものを描こうとする知的写実主義者である。
- (32) *Ibid.*, p.128. (邦訳, 135頁.)
- (33) *Ibid.*, p.128. (邦訳, 135頁.)
- (34) 児童心理学及び青年心理学の創始者とも言われる、アメリカの心理学者である。代表作である『児童の生活の諸相と教育 (Aspects of Child Life and Education)』では、彼の心理学のよりどころであった先祖返りの説 (Recapitulation Theory) を牧歌的、物語ふうにした田園詩とも言うべく、彼の心理学的立場を何う事のできる内容となっている。
- (35) イギリスの女性心理学者であり、精神分析家である。彼女は、ピアジェの「幼児の自己中心性」論に対し、反証を掲げて幼児の思考の論理性を主張し、発達を教育との関係で捉える重要性を訴えた。
- (36) S.アイザックス著、榊瑞希子訳『幼児の知的発達』明治図書、1989年。
イギリスの「デューイ・スクール」と呼ばれたモルティングハウス校 (Malting House School, 1924-1929) でアイザックが3年半にわたり進めた研究の報告書となっている。その内容は、幼い子どもはどの様にして知的諸能力を発達させて行くのか、また、幼児の為の学校はどのような機能が果たせるのかについて、具体的なデータをもとに理論的な見解が述べられている。
- (37) J.Piaget, *Psychologie et Pedagogie, paris, Denoel*, 1969, pp.247-248. (ピアジェJ著, 竹内良知/吉田和夫訳『教育学と心理学』明治書房, 1975年, 158頁.)
- (38) 猪田裕子著「遊びにおける哲学的視点の必要性ーピアジェの子ども理解の視点を軸にー」『キリスト教教育論集』第19号, 2011年, 7-8頁。
ピアジェは、臨床法を用いデータを積み重ねる事で見えてくる原理を使用すると言う一貫した姿勢を貫いた。ともすれば実証主義的にも見えるが、明らかにそれとは違い、いかなる問題をも破棄する事なく、また解決できない問題に遭遇した場合、いつかは科学の進歩により解決できると言う信念のもと、よりいっそうの努力を行ったのである。これは科学と言う言葉を使いつつも、ある種の信仰ともいえる想いであり、彼のこれまでの経験である哲学的視点を実証主義に陥る事を拒んできたといえる。
- (39) J.Piaget, *Psychologie et Pedagogie*, p.254. (邦訳, 162頁.)
- (40) 平成26年11月、中央教育審議会に対し「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」として文部科学大臣より諮問文が出された。この諮問文を受けて平成27年8月に教育課程企画別部会において論点整理が行われ、2030年の社会とその先の社会に生きる子どもに、どのような資質や能力の育成が必要かと言う、学習指導要領改訂に向けた議論が始まった。その中で「アクティブ・ラーニング」の意義も議論されているが、これはピアジェの言う「能動的な教育」と同意の内容である。
- (41) 人間形成における可逆性とは、他人の立場に立って物事を考える、と言う視点と同様であり、これは社会生活での相互関係によってのみ可能となる。つまり、相互に対等な社会的関係の中で、物事

を考え行動する事により知性や人格は成長し発展するのである。それ故、ピアジェは子どもの発達における社会化を重視している。

(42) *Ibid.*, p.262. (邦訳, 168頁.)

(43) *Ibid.*, p.264. (邦訳, 169頁.)

(44) *Op.cit.*, J.Piaget, *le jugement et le raisonnement chez l'enfant*, p.195. (邦訳, 265頁.)

〈参考文献〉

厚生労働省著『保育所保育指針解説』フレーベル館, 2008年.

文部科学省著『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008年.

内閣府, 文部科学省, 厚生労働省著『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 2015年.

J.Piaget, *La causalité physique chez l'enfant*, Librairie félix alcan, 1927. (岸田秀訳『子どもの因果関係の認識』明治図書, 1971年.)

J.Piaget, *Le jugement moral chez l'enfant*, puf, 1932. (大伴茂訳『児童道徳判断の発達』同文書院, 1957年.)

J.Piaget, *Le langage et la pensée chez l'enfant*, delachaux et niestlé, 1941. (大伴茂訳『児童の自己中心性』同文書院, 1974年.)

J.Piaget, *La représentation du monde chez l'enfant*, puf, 1947. (大伴茂訳『児童の世界観』同文書院, 1956年.)

J.Piaget, *Sagesse et illusions de la philosophie*, puf, 1965. (岸田秀・滝沢武久共訳『哲学の知恵と幻想』みずず書房, 1976年.)

J.Piaget, *Psychologie et Pédagogie*, paris, Denoel, 1969. (ピアジェJ著, 竹内良知/吉田和夫訳『教育学と心理学』明治書房, 1975年.)

J.Piaget, *le jugement et le raisonnement chez l'enfant*, Delachaux Niestlé, 1978. (滝沢武久/岸田秀訳『判断と推理の発達心理学』国土社. 1971年.)

ルソー著, 今野一雄訳『エミール』岩波書店, 1998年.

S.アイザックス著, 榊瑞希子訳『幼児の知的発達』明治図書, 1989年.